



妖精の森ガラス美術館

岡山県 鏡野町

■ 妖精の森ガラス美術館

【岡山県鏡野町の概要】

美しい水資源に抱かれた森林から田園風景が広がり、温泉や農林水産物など、豊富な健康素材に恵まれています。

[人口] 約13,200人

[標高] 110m～1,248m

[面積] 419.69km²

[割合] 山林78%、田畑15%

[アクセス] 中央部まで
(鉄道・バス)

JR津山線・津山駅から
中鉄北部バスで60分
(自家用車)

- ・大阪市から2時間45分
- ・岡山市から1時間30分
- ・中国道院庄ICから25分
- ・倉吉市から45分



■ 妖精の森ガラス美術館

妖精の森ガラス美術館

【概要】

[開館]

2006年(H18年)4月

[所在地]

岡山県苫田郡鏡野町

上齋原666-5

[規模]

鉄筋コンクリート造

地上2階建 716.36㎡

[用途]

ウランガラスを中心とした
ガラス製品の製造及び展
示。

- ・常設展示室
- ・企画展示室
- ・制作工房
- ・アートショップ

[駐車場]

30台(無料)



外 観

■ 妖精の森ガラス美術館

ウランガラス(妖精の森ガラス)の特徴



ウランガラスは、微量のウランを混ぜた色ガラスのことで、通常は黄緑色をしています。紫外線に当たると美しい緑色の蛍光を放つのが大きな特徴です。

1830年頃、チェコのボヘミア地方で作られ、その後欧州や米国で花瓶や食器などが大量に作られます。その後、第二次世界大戦時に禁止されましたが、戦後になり一部の国で製造が再開されました。

ウランガラスに含まれるウランは0.1~1%程度で、自然界からの放射能よりも極僅かとされており、全く心配する必要はありません。

現在は、米国やチェコでほんの少しだけ生産されており、日本のウラン鉱山であった岡山県鏡野町の人形峠(妖精の森ガラス美術館)で、日本で唯一のウランガラス工芸品が作られ好評を得ています。

■ 妖精の森ガラス美術館



常設展示室



エミール・ガレ「花蝶文化瓶」
(1894年頃)



ロシア皇帝のゴブレット
(1840年代)

■ 妖精の森ガラス美術館



企画展示室



前半会期 2017.10/18^土→2018.1/8^日

後半会期 2018.1/10^土→4/15^日

会場/妖精の森ガラス美術館2階企画展示室



ひかりのかたち展(2017年)



■ 妖精の森ガラス美術館



制作工房



吹きガラス体験



サンドブラスト体験



リューター体験

■ 妖精の森ガラス美術館



アートショップ



妖精の森ガラス(人形峠産ウランガラス)

ご清聴ありがとうございました。

岡山県 鏡野町



妖精の森ガラス美術館

岡山県鏡野町
妖精の森ガラス美術館整備経緯
(ウランガラス開発経緯)

平成 29 年 10 月 16 日

妖精の森ガラス美術館

□はじめに

岡山県鏡野町は平成 18 年 4 月、人形峠に程近い上齋原に、ガラスの展示施設と制作工房、アートショップを備えた「妖精の森ガラス美術館」を開館しました。この施設は、日本では現在ここでしかできない「ウランガラス」を展示・制作する目的で建設されたものです。

□鏡野町上齋原地区とウラン資源

鏡野町上齋原地区は区域のほとんどが山林です。これまで、この豊かな自然資源を生かし、高原リゾートの開発や温泉を活用した国民宿舎の整備などを行ってきました。



■妖精の森ガラス美術館外観

昭和 30 年、人形峠でのウランの発見はこの地区に貴重な地域資源をもたらしました。翌年の原子燃料公社の設立後、国内でただ一ヶ所、ウランの探鉱、採鉱、製錬、転換及び濃縮の技術開発が行われました。平成 13 年にウラン濃縮の役務運転を終了し、以後、使用施設・設備の廃止措置が主要業務になっています。

この間、旧上齋原村は、「人形峠原子力産業株式会社」を設立し、住民の雇用を促進する体制を作りました。これに対し、平成 10 年に、科学技術

庁（現文部科学省）、岡山県、旧核燃料サイクル開発機構、旧上齋原村の間で合意された事項に基づき、(財)日本宇宙フォーラムが計画した「上齋原スペースガードセンター」の建設への協力と、旧上齋原村が開発するガラス工芸品製作への技術協力が行われることになりました。

□旧上齋原村による調査事業

旧核燃料サイクル機構のバックアップを受け、旧上齋原村は平成 10 年からウランガラスの開発可能性の調査を始めました。平成 10 年、11 年、12 年、13 年の 4 回に亘り、ウランガラスの安全性に関する調査を行い、ウラン含有量が 0.05～0.1 重量パーセントの場合、使用する人への影響は、自然放射線の基準をかなり下回るという結果を得ました。

また、平成 12 年 3 月、16 日間に亘ってヨーロッパやアメリカのウランガラスの調査を行いました。その結果、チェコやアメリカで、戦時中、一時製造が中止されていたウランガラスがまた作られていること、各国の骨董店の店頭にかなりのウランガラスが並んでいること、ウランガラスの愛好家団体があることなどが分かりました。調査団のまとめとしては、上齋原の固有の財産としてウランを生かすには、ウランガラスの生産が最適であること、手に取りたくなくなるようなきれいなガラスをめざすこと、美術館などの展示により、ウランガラスの数奇な歴史やその安全性を広く認知してもらうことが有効であるなどの結論に達しました。

□ウランガラスの試作

これらの調査結果を受け、旧上齋原村は、旧核燃料サイクル機構や(社)日本ガラス製品工業会などの協力のもとに、平成 13 年から 15 年にかけて、国内のガラス作家を招聘し、数回に亘ってガラスづくりの試験を行いました。ただし、ウランそのものは国際規制によって厳重に管理されているので、旧サイクル開発機構内でガラス原料との調合をしていただき、電気炉に投入し、1300℃で熔融して初めて、ガラス工芸家による作業を行いました。



■山田輝雄「ぐい呑み」

「森のガラス：ヴァルトグラス」と呼ばれていたことも、名称に「森」と「妖精」を組み合わせるきっかけとなりました。

また、吹きガラス、電気炉による鋳造、カット（切子）、ガスバーナーによるビーズ作りなど、さまざまな技法によるガラス作りを試みました。その結果、微量のウラン（0.1 重量パーセント）を添加したソーダガラスで、さまざまな製品が可能であることが分かりました。

また、ウランガラスが紫外線を当てると緑色の蛍光を放つという現象に注目し、それが月光を浴びて輝く妖精を思わせることから、開発したガラスを「妖精の森ガラス」と名付けました。妖精が森を棲家とすることや、ヨーロッパではガラスに木灰を使用することから、主に森の中でガラスが生産され

□美術館と工房の構想と建設

ウランガラスの安全性、歴史や現状の調査を踏まえ、旧上齋原村は平成13年に「ガラス事業化基本計画」を策定しました。平成16年には、構想をさらに充実させ、オンリーワンの地域産品「妖精の森ガラス」の開発を機軸に、地場産業の育成と観光開発、地域文化の育成の拠点としての美術館の「実施設計」を作成しました。そして同年10月、ガラス工房棟の建設に着工し、平成17年3月に竣工。5月には工房スタッフを2名雇用しガラス制作を開始しました。美術館は平成17年4月に着工し、平成18年3月に竣工。同年4月24日に全館開館となりました。

□美術館の活動

美術館は、ガラスを展示する美術館棟と、ガラスの制作や体験を行う工房棟からなっています。

ウランガラスは1830年頃ボヘミア地方（現在のチェコ共和国）で開発され、20世紀半ばまで欧米や日本で盛んに作られました。美術館1階の常設展示室には、ウランガラスのコレクションとして世界的に名高い苦米地顯当館名誉館長のコレクションから借用した、1840年の記銘を持つミルクピッチャーや、1880年代イギリスのエパーン（卓上飾り）、タンブラーや花瓶、アクセサリ類などが70点余り並んでいます。このコレクションは平成27年に苦米地氏から鏡野町に対して寄贈があり、現在では妖精の森ガラス美術館の収蔵品になっています。

常設展示室ではフランス・アールヌーボーの巨匠、エミール・ガレの「花蝶文花瓶」が展示に一層の華を添えています。また、一部の作品は押しボタンで通常照明から紫外線照明に切り替わり、ウランガラスに特有の幻想的な緑の蛍光を発します。入館者の多くが、ウランガラスなど見たことも聞いたこともない方々ですが、紫外線で蛍光を発する現象に驚くと同時に、ウランガラスが意外に古くから欧米や日本で生活の中で親しまれていたことにもっと驚いています。



■館内風景



■ミルクピッチャー
1840年



■ゴブレット
1840年代



■ガレ「花蝶文花瓶」
1894年頃

□企画展

2階企画展示室では、年に数回、ガラスの歴史や現在を紹介する小企画展を開催しています。



■日本のガラス工芸展 平成22年



■ウランガラスの世界展 平成23年



■現代ガラス5人展“変幻自在”平成27年

□工場の活動

工場棟には、ウランガラス用とウランを使わないガラスのための溶解炉 2 基を始め、溶着用の電気炉や切子の加工機など、さまざまなガラス工芸に対応する機材を備えています。現在 3 名のスタッフが、人形峠で調合・溶融・冷却して作ったウランガラスのカレットを再溶融してさまざまな「妖精の森ガラス」を制作するほか、ウランガラス以外の作品も制作しています。

また、毎週土日、祝日と 7 月末から 8 月末には、観光客や地域の人々を対象に、吹きガラス、サンドブラスト、リューターのガラス体験を行っています。2 階にある工房研修室から工房内部と作業風景を見学できるようになっています。



■吹きガラス作業（三浦和）



■カットガラス作業（日浦佑記）



■吹きガラス体験（谷口絢香）

□アートショップ

アートショップは美術館のエントランスに続く場所にあり、工房で作られた「妖精の森ガラス」を中心に、作家や工房制作によるガラス作品を販売しています。



■アートショップ（ウランガラス商材）



■アートショップ（ソーダガラス商材）